

第4章

実践事例

この章では、ことばの教室やLD等通級指導教室、盲・ろう学校通級における具体的な実践事例を紹介します。事例は通級による指導を利用するまでの取組や、通常の学級と連携した取組などを2ページ程度にまとめています。また、それぞれの事例の最後には「ここがポイント」という項目を設け、事例の要点をまとめていますので、ぜひ、支援の参考にしてください。

事例 1

アセスメントを通し

児童の課題が明確になった事例

～ことばの教室を利用するまでの取組～

保育園の頃から発音が不明瞭だったミキさんを心配した保護者は、パンフレットでことばの教室の存在を知りました。担任の先生や特別支援教育コーディネーターの勧めもあり、ことばの教室に一度相談してみることに決めました。ことばの教室の初回面接で、アセスメントを行い、ミキさんと保護者それぞれのニーズ、今後の支援の見通しが明らかになっていった事例を紹介します。


◇ 入学当初のミキさんと保護者と担任



ミキさん
「おさかな」が「おしゃかな」になっちゃうの。



ミキさんの保護者
新しい生活が始まって、ことばのことでかわられないかしら。



学級担任
発音は気になってたんだよなあ。A小にことばの教室があると聞いたけど。

学級担任 ⇨ 特別支援教育コーディネーター (校内委員会等) ⇨ ことばの教室の担当

保護者から話を聞いた学級担任は校内の特別支援教育コーディネーターに相談しました。申し込みの手続きを経て初回面接となりました。その間、学級担任からは学級での様子を通級担当（ことばの教室の担当）に知らせてもらいました。

◇ 初回面接

通級担当は保護者から、生育歴やこれまでの相談歴等を丁寧に聞き取っていきました。「いつか治るだろうと思っていたがいつまでも治らないこと」「小学校に入学し、友だちに何か言われなにか心配なこと」「ことばを正しく言えるようになってほしい」など、子育てをする中で感じられた保護者の不安や心配、願いを受け止めていきました。

通級担当は、ミキさんのアセスメントを通して何が課題なのか探っていくことを保護者に伝え、ミキさんとの面接に移りました。



ことばの教室の担当

ミキさんはことばのことで困ったことはあるのかなあ。

上手にサが言えないの。お友だちに笑われて悲しかった。



ミキさん

◇ アセスメント

(発話の様子) 通級担当は、はじめにミキさんに困っていることを聞きました。するとミキさんは、毎日の学校生活の中で、ことばがうまく言えなくて困っていることや悲しい思いをしたことがあることを話してくれました。このことは保護者も知りませんでした。そんな経験から、ミキさんが、学校ではあまり話さず目立たないようにしていることが分かってきました。

(行動観察) 話をしてみると、ミキさんは、話すのが嫌いなわけではなく、むしろ聞いてくれる人がいれば、たくさん話したいという思いをもっている子だと感じました。遊びに誘うと、縄跳びやフラフープなど活発に動くミキさんの姿がありました。ダンスをしたり、歌を歌ったり表現することが大好きな様子も伝わってきました。

(検査等) 会話の内容ややりとりに問題は見られなかったことから、保護者とミキさんの主訴にそって構音検査、聴力検査、語音弁別検査を実施していくことにしました。検査後、聴力には問題がないこと、口腔内にも問題がないこと、器質的な疾患もないことが分かり、課題は「サ→シャ」、「ザ→ジャ」等の置換、そして語音弁別力が弱いことが確認されました。

本人もうまく言えないことを自覚して悲しい思いをしています。自信をもって話ができるよう「ことばの教室」に通って指導を受けることをお勧めします。



通級担当は、検査の結果と、本人の（気持ちを含めた）状態から考えて、通級による指導が必要であることを保護者に話しました。その際、家で気を付けることやできることについても話しました。

◇ 結果

ずっと不安で思い悩んできたミキさんの保護者は、ことばの教室でのこれからの指導について聞くことができ、ほっとしました。そして、ことばの教室での学習が、ミキさんにとって必要なことと考え、通級を希望しました。ミキさんも通級担当と話したり、遊んだりする中で、この教室ではことばがうまく言えなくても笑われない、自分の思ったとおり表現できることが分かり、通級して学びたいという思いが強くなりました。

その後、通級担当は、ミキさんの通う小学校に報告書でミキさんの状態を伝え、校内での検討と通級手続きを進めること、学校や学級内での配慮事項について伝えていきました。

ここがポイント



通うのが楽しみだな。

相談してよかった。



学級の中に、発音の不明瞭な子、ことばが詰まる子、たどたどしい話し方をする子はいないでしょうか。学校生活の中では問題行動もなく目立たないので、見過ごされやすく、保護者と子どもが不安を抱えたままになっているケースがあります。

発音や話し方について気になるとき、あるいは相談されたときには、ことばの教室の担当者に相談しましょう。できるだけ早く、子どもの実態を把握すること、支援のニーズや支援方法を明らかにすること、そして何より今ある不安を解消することが大切です。子ども自身が本来の姿で、のびのびと生活できるように支援していきましょう。

事例 2

正しい発音ができるための取組

～サ行音がうまく言えない場合～

シズカさんは、1年生の半ばを過ぎても正しい発音ができず、友だちからそのことを指摘されることを気にするようになっていました。保護者と特別支援教育コーディネーターから相談を受け、検査を行ってみると、サ行・ザ行・ツ・チの音について、正しく発音できないことがわかりました。シズカさんが1つずつ課題を克服して正しくサ行音を言えるようになった事例を紹介します。

◇ 通級を開始したころのシズカさん

- 話し掛けられると答えることはできるが、自分から話そうとすることは少ない。
- 相手の顔を見て話すことは習慣となっているが、口の動きや声が小さいため、ことばが不明瞭で、聴き取ることができないこともある。
- 教科書を読むときには、ところどころで自分なりにことばをつくって読んでしまうことがある。

◇ 指導の方向

- 1 興味のある活動を取り入れ、発音の誤りを気にしないで自分らしく話をするができるような関係づくりをしていく。
- 2 獲得したい音と誤っている音を聴き分けることができるようになる。
- 3 ことばを構成する音の数や学習している音の位置を確認しながら、ことばを正しく認識する。
- 4 基本的な音づくりを進め、正しい発音を獲得することができる。
- 5 日常会話の中で正しいサ行音の発音ができる。

◇ 指導の経過

1 自分らしく話そう

○ピアノを弾くことが好きなシズカさん。通級指導教室にトイピアノを用意し、自由に弾けるようにしました。教室に来たときに「弾いてもいいんだよ」と誘うと、初めは恥ずかしがっていましたが、「今、ピアノ教室で習っている曲だよ」「これ音楽会でやったんだ」と、自分から弾いて聴かせてくれるようになりました。



○体を動かすことが好きなシズカさん。体育館でボール投げやボール蹴りをたくさんやりました。10メートル以上離れていても、はっきり聴こえるような大きな声が出るようになりました。

2 スかな？シュかな？

○サ行音の中で最初に指導する音「ス」と誤り音になっている「シュ」を聴き分ける学習を次のような段階で取り組みました。

- ① いろいろな音を続けて聴く中で、「ス」のときに、または「シュ」のときに手を挙げて聴こえたことを知らせる。

ちゃんと
言える
ようになりたい



- ② 「ス」と「シュ」だけを1つずつ聴いて、聴こえた方の文字カードを指さす。
- ③ 「ス」と「シュ」を組み合わせて聴いて、聴いた順番に文字カードを指さす。
「ス→ス」 「ス→シュ」 「シュ→ス」 「シュ→シュ」

3 「ス」はなんばんめ？

○ことばを正しく認識できるよう、以下のような学習をしました。

- ・「ス」の付くことばカードで遊んだ後、カードのことばについて質問をしました。「すいか」や「からす」「カスタネット」などの絵を見て「いくつの音でできている？」『ス』はなんばんめ？』などの質問に答えられるようになりました。
- ・「ならべかえてみよう」……ことばをつくる文字や、ヒントを手掛かりに、文字カードを使ってことばをつくるゲームをしました。
- ・しりとり遊び……自分で言ったことばは必ず書いて相手に渡すようにし、言ったことばを正しく書くことができるようになりました。



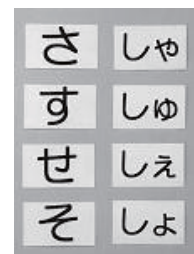
4 「ス」が言えるようになろう

○「ス」の音づくりは、以下のように学習しました。

- ・舌の力を抜いた「ふんわりとした平らな舌」づくり。
- ・舌の上に載せたストローを軽く上の歯で押さえて吹く練習をしました。そしてストローを抜いても、舌と上の歯の間から風の音（英語の th に近い音）を出すことができるようにしました。（指導の実際 p.35～37 参照）
- ・風の音から導いて「ス」が出せたら、「ス」の前後に他の音をつけても正しく「ス」の音が出すことができるようにしました。
- ・単語練習や短文・長文練習では、「ス」の位置を確認してから練習を行いました。

5 会話の中でも「ス」が言えるようになろう

単語や文の練習では正しい発音ができただけですが、会話になると、まだサ行音をシャ行音に近い音で言っていることがありました。再度聴き分ける練習をしてみると、「ス」と「シュ」や「サ」と「シャ」のような特定の組み合わせでは聴き分けていたのですが、サ行音とシャ行音すべてを対象にやってみると、かなり混乱してしまうことが分かりました。そこで、サ行とシャ行の音をランダムに聴き、カードを指さしたり、言ったりして答える練習をしました。4つ～5つの音を続けて聴いても、それを正しく返すことができるようになりました。最後の会話練習の中では、誤りを指摘するよにしたことでシズカさんは次第に自分で気付いて言い直すようになり、サ行音の誤りはなくなりました。



ここがポイント

「ことば」は、相手に自分の思いを伝える方法の一つです。ですからまず大きな声でハキハキと話す態度を身に付けることが大切です。そして練習で聴き分ける力を身に付け、発音の練習を焦らずスモールステップで進めます。練習が進むにつれ、改善への意欲も出てくると、誤りに対する指摘も前向きに捉えるようになります。正しくできたところも誤っているところもきちんとフィードバックしていくことで、日常会話への般化につながっていきます。

事例 3

通常の学級と連携した取組

～吃音がある児童と在籍学級の子どもたちとの関わり～

吃音がある小学校3年生のカナさんは、ことばの教室で吃音についていろいろな学習をします。吃音で困っていることに対して対策を立てたり、周りの友だちにどう話していったらよいかを学んだりしています。また、吃音の話しにくさに関係なく、主体的に得意なことややってみたい活動に取り組んでいます。在籍学級のみんなに楽しんでもらいたいという願いをもったカナさんが、在籍学級の担任の先生の協力を得て主体的な活動をした事例を紹介します。

◇ 通級を始めた頃のカナさん

カナさんは小学校1年生の時からことばの教室に通っています。やや消極的なカナさんは吃音の症状が苦しい時も多いのですが、とてもおしゃべり好きな女の子でした。まじめで優しいカナさんは、友だちにも頼りにされている様子でした。でも、リーダーに推薦されても「無理～、やりたくないよ」という後ろ向きな反応も見られました。

◇ ことばの教室でのカナさん

ことばの教室には毎週とても元気に通ってききました。カナさんは吃音症状に関わらずクラスのこと、家庭でのこと、いろいろなことを話しました。必ず取っているフリーストックの時間は、通級担当はどんな内容でも共感的に聴くこと、話の途中で割り込まず最後までゆったり聴くことを心掛けます。話の中で特に話し方について困っていることがあれば、状況や本人の気持ちを聴き取り、対策をともに考えていきます。1年生の時は仲のよい友だちに話し方をまねされて嫌だったことが何回かありました。その都度、学級担任にカナさんの気持ちを伝えたり、話し合った対策について協力を求めたりしてきました。学級担任はすぐに対応して対象の友だちやクラスのみんなに話をしてくれ、クラスで嫌な思いをすることはなくなっていました。

◇ クラスのみんなに楽しんでもらう活動をしたいという願いをもったカナさん

クラス替えのあった3年生の1学期当初、今年のことばの教室でどんな活動をしてみたいか話し合いをしました。カナさんは、吃音の学習を頑張りたいということ、みんなを楽しませることをやりたいという願いをもちました。週1回ことばの教室で学習しながら、具体的にできそうなことを考えていきました。そして、「ぼうけんアスレチック」という活動をすることに決まりました。

◇ 学級担任の支え

新しい学級担任もカナさんの話をしっかり受け止めて聴いてくれました。また、吃音があるカナさんへの配慮についてこ

ことばの教室の担当にすぐに質問をしてくるなど、一人一人を大切に考えている学級担任でした。もちろんカナさんも大好きになりました。ことばの教室の連絡ノートにはいつもカナさんの頑張る様子を書いてくれていました。早速「ぼうけんアスレチック」のことを学級担任に相談しました。カナさんはアスレチックの紹介ポスターを作りました。



帰りの会の連絡で発表することにしましたが、吃音症状の苦しい時だったのでポスターを見せるだけにしました。その時、学級担任は当たり前のように、一緒に説明してくれました。担任が常に見本を見せているので、クラスの友だちもカナさんが言いにくいときは、さりげなく一緒に言ってくれたり、助けてくれたりする雰囲気が出ていきました。

◇ 「ぼうけんアスレチック」

それは、ことばの教室のスペースに滑り台、跳び箱、平均台、リングなどを並べてアスレチックコースを作り遊んでもらうというものでした。自分でもやってみてどうしたら楽しめるか試行錯誤し、ことば遊びのコーナーを入れたり、スタンプカードを作ったりしました。まずは休み時間にクラスの有志に遊んでもらいました。なかなかの好評に自信をもってきたカナさんは、クラスのみんなでもやりたいという願いをもちました。

◇ 学級活動

休み時間のような短い時間でなく、クラスのみんなに来てもらおうと、学級担任に相談しました。学級担任はすぐに日時を決めてくれました。どうやって進めていくかカナさんと打ち合わせをして当日に臨みました。当日は、カナさんがコースの説明や注意点などを発表し、クラスのみんなに遊んでもらいました。学級担任は、子どもたちと同じようにコースを周ってくれて、とても楽しい時間になりました。最後の感想発表では「カナさんのアスレチックはとても楽しかったです」「また、みんなで遊びたいです」などたくさんの友だちが言ってくれました。



◇ 全校への呼びかけ

クラスでの成功から、全校にもポスターを作って呼び掛けることになりました。休み時間にはたくさんの児童が集まりました。カナさんのクラスの友だちも手伝ってくれました。その中でカナさんはコースの説明や進行をしました。1か月ほどの活動でしたが、カナさんは、「みんなに喜んでもらってよかったです」と感想に書き、大きな達成感をもったようでした。

◇ その後のカナさん

カナさんの願いから、在籍学級のみんなと楽しみ、カナさんが主役になれた活動になりました。やや後ろ向きな発言や行動が多かったカナさんは、この活動のころから前向きな発言が増えてきました。

ここがポイント

吃音があると話すことに抵抗をもつことが少なくありません。ことばの教室では、身体的にも心理的にも「楽に話せる」支援を大切にしています。吃音症状の軽減のための支援、話し手である児童の心理面の支援、家庭やクラスなど吃音を指摘することなく受け止めてくれる環境への支援、また、この事例のように話すことが自然に入ることもねらいつつ、児童の願いにそって主体的な活動を組む支援もあります。ことばの教室の活動が学級担任の協力を得たことによって、クラスみんなとの関わりに広がり、その自信が全校へ広がりました。ことばの教室も在籍学級も、通級を利用している児童が何でも安心して話ができる雰囲気をつくっていくことがすべての基になります。常に情報交換をして互いの学習内容を分かっていると、必要な支援が共有できます。支援のポイントを在籍学級の担任が知っていることでクラスの友だちや他学級、他学年の友だちにも吃音がある児童について理解が進み、安心して話ができる環境が整っていきます。

事例 4

ことばの教室から LD 等通級指導教室へ

～ニーズの変化に視点を当て適切な支援を行った取組～

小学 1 年生のカンタさん。在籍校から、吃音の主訴でことばの教室へ通級依頼が来ました。初回面接時、本人は「発音がうまくいかない」とことばの教室の担当に話し、保護者は授業中の立ち歩きや集団でのトラブル等行動面を気に掛けていました。

ことばの教室の担当、LD 等通級指導教室の担当、特別支援教育コーディネーター、学級担任、保護者が連携し、カンタさんに合った学びの場での適切な支援や指導を行う中で、通常の学級での学習が成立し、行動が変容してきた事例を紹介します。

◇ 1 年生 1 学期末の初回面接

<学校・保護者>

周りの児童とのトラブルが多く、困っている。



<カンタさん>

吃音：少しつかかるけど、気にしていない。話すこと大好き。



発音：「カンタ」が「タンタ」になってしまう。誰にも言えない。



保護者や学級担任が困っていたのは、学習時の立ち歩きや集団生活でのトラブルでした。他方、カンタさんはカ行・ガ行音の発音がうまく言えなくて困っていました。ことばの教室の担当は、保護者に吃音について基礎知識を伝え、吃音への理解を求め、受け入れていくことの大切さを話しました。そして、ことばの教室で構音指導を行うことを伝えると同時に、行動面の問題にも着目して、学校とも連携しながら、医療につながることも提案しました。その後、就学相談の手続きが進み、ことばの教室へ通うことになりました。

<ことばの教室 ～2年> 発音指導

- 1 保護者との懇談・医療との連携 → ADHD 診断（薬服用）WISC-IV 検査実施
- 2 発音のトレーニング（集中できる教材の工夫、めりはりのある授業展開） → 改善
- 3 週 1 回、朝からことばの教室へ通い、2 時間目から在籍校で学習できる時間割
→ 在籍学級で気持ちよく授業を進められる。
- 4 失っている自信を取り戻す（興味のあるもの、得意なことを生かす）
→ 学習場面で意欲的に取り組めることが多くなる。
- 5 本人の特性を生かした指導・配慮をことばの教室から発信（在籍学級での環境調整）
→ 学級担任が在籍学級での指導に生かし、配慮を行い、環境調整をする。

2 年次の様子

カ行・ガ行音の発音は改善されました。その反面、学校で友達とのトラブルや学習時に集中できないことがまだありました。

そこで、在籍校の特別支援教育コーディネーターに相談し、保護者に LD 等通級指導教室への移行を確認しました。その後、スムーズな移行に向け、LD 等通級指導の教室担当と連携を図りました。

<LD等通級指導教室への移行の流れ>

- 1 在籍校の特別支援教育コーディネーター，学級担任と移行について相談
- 2 移行について保護者の意向の確認
- 3 在籍校での校内委員会で検討・判断
- 4 市町村教育委員会での判断（LD等通級指導教室判断）
- 5 LD等通級指導教室の授業体験（ことばの教室担当同伴）と自由遊び，保護者面談
- 6 通級担当間で，個別の指導計画や指導内容，児童の資料の共有（保護者承諾受け）

こうして3年生から，LD等通級指導教室の利用がスタートしました。

<LD等通級指導教室 ～6年> 行動面へのアプローチ

- 1 コミュニケーションの学習 →困っているときに担任に伝えられるようになる。
ソーシャルスキルトレーニング→集団登校でトラブルが少なくなる。
- 2 教科の補充 等 →授業で，自力でできることが増える。

6年生時の様子

教室で目立ったつまずきもなく，過ごせています。（担任）



育て方が悪かったのではと，自信をなくし，子どもの人格を否定していたときもありました。通級指導教室に通い，子どももやる気を取り戻し，私も育ての相談ができて迷うことが減りました。（母親）

ここがポイント

通級の主訴の決め出しはとても大切で，難しいものです。保護者，学校，本人によって，困難さやニーズは違います。まずは，保護者や学校，本人の話をよく聞き，主訴を明確にしましょう。その際，今，この子に一番必要な支援は何なのか，どの学びの場で学習することが必要なのか，子どもを中心に据えて考えていきましょう。そして，関係者が連携し，目標や指導方針等を共有し，それぞれの立ち場や役割を大切にしながら指導を積み上げていくことが大切です。そうすることで，特性ゆえに困難さを抱えている子どもが自信をもち，本来もっている力を発揮することができるのではないのでしょうか。

通級指導教室が連携し，子どもを支える

ことばの教室を終了したカンタさん親子を，ことばの教室主催の「吃音親子交流会」に毎年誘いました。6年生まで，毎年参加し元気な姿を見せてくれました。保護者は，「吃音を前向きに受け入れ，話をじっくり聴くことを心掛けている」と話し，吃音があるカンタさんを支えてくれています。カンタさんも堂々と自己紹介をしていました。



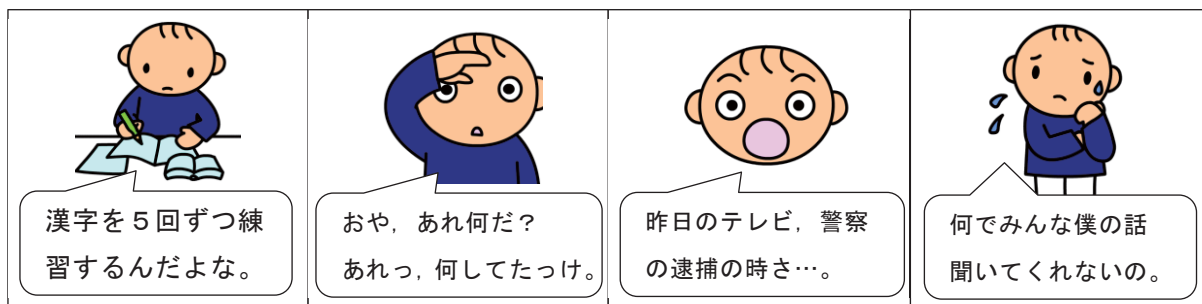
事例5

学校からの相談がきっかけで

～ LD 等通級指導教室を利用するまでの取組 ① ～

3年生になるまで、通常の学級を学習の場としてきたリョウタさん。通級担当が、すでに通級を利用していた同じ学校の児童の授業参観をした折、特別支援教育コーディネーターからリョウタさんについての相談があり、引き続き授業参観をしました。心配な点をその日のうちに確認し、教育相談、WISC検査、市町村教育支援委員会での就学相談を経て、通級を開始していくまでの事例を紹介します。

◇ 授業で集中できない・友だちとの会話が一方的なりョウタさん



リョウタさんの様子をのぞいてみると、国語の時間に漢字の書き取り練習をしていました。最初は漢字ノートに教科書の漢字を練習していたのですが、屋外の音や友だちから発せられる言葉に気が向いたり、消しゴムの消しかすを集めたりしているうちに、何をしていたのか分からなくなっているようでした。残り時間が少なくなると、丁寧さがなくなり、急ぐあまり間違いが増えていきました。チャイムが鳴ると片付けが終わらないうちに、昨晚見たテレビの1シーンについて、友だちに一方的に話し始めるリョウタさん。その番組を見ていない周囲の友だちは、困ったような表情をしていました。

このままでは、学習面での心配だけでなく、クラスの間人間関係にも困難さが広がると思われたので、まずは学級担任と特別支援教育コーディネーターで、保護者と懇談をするようにお願いしました。

【保護者との懇談では】

- ① 学校での様子を共有し、
- ② 家庭での宿題や放課後の遊びでも心配な点が増えていることを確認し、
- ③ 本人の特性を理解するために、特別支援学校の教育相談専任の先生にWISC検査を依頼することにした。



【WISC検査を実施した後】

- ① 結果から本人の特性を共有し、
- ② 「LD等通級指導教室」の存在を紹介してもらい、
- ③ LD等通級指導教室の担当との懇談を、同意してもらうことができた。

◇ LD等通級指導教室につながったリョウタさん

その後、LD等通級指導教室の担当が同校へ出向き、保護者、校長先生、教頭先生、学級担任、特別支援教育コーディネーター、特別支援教育支援員を交えた支援会議を行いました。実施されたWISC検査の結果も踏まえながら、今後はLD等通級指導教室を体験する方向で話が進みました。

LD等通級指導教室の紹介プリントを渡しながら、以下のような点を確認していきました。

- ① おおむね通常の学級で学習できていて、発達障がいなどに見られる、困難さを有する子どもの学びの場であること。
- ② 市町村教育支援委員会へ検査等も含めた現況の資料を提出し、通級による指導が望ましいという判断が必要になること。
- ③ 他校への通級になるので、保護者の送迎をお願いすること。
- ④ 通級を利用する時間については、在籍校の担任を交えて相談していくこと。
- ⑤ 取組内容を明確にするために、医療機関への受診が有効であること。

以上の点を校内教育支援委員会でも確認してもらい、保護者、在籍校とともに相談を進めていきました。

市町村教育支援委員会での判断を待つ間にも、体験的な通級を月に1回～2回開始しました。まずは通級担当との関係づくりから始め、徐々に課題の内容を深めていきました。途中、医療機関への受診もでき（診断：ADHD、LD）、通級による指導での教育課題がより明確になりました。数回、通級を体験したところで、正式に市町村教育支援委員会の通級判断が出たので、在籍校での支援会議を再度行いました。校長先生にも同席してもらい、学習内容はもちろん、今後の通級の方法などについて確認していきました。

現在、リョウタさんは個別の学習（ビジョントレーニングやタブレット端末を利用した漢字の学習）と少人数でのソーシャルスキルの学習を平行して取り組んでいます。医療機関からは電子辞書等の利用も紹介してもらい、家庭学習に利用しています。通級担当は、通級指導教室での授業以外にも、在籍校での授業参観を行い、小学校卒業後も視野に入れた支援会議を継続しながら、リョウタさんへの支援を続けています。



ここがポイント

どの学級にも「集中力に欠ける子」「友だちとの関係づくりがうまくいかない子」はいるのではないのでしょうか。その傾向が顕著な時は、校内だけではなく、各圏域の通級担当や特別支援学校の教育相談専任に相談してみることで、その子の学びを保障することにつながる場合があります。保護者との共通理解を図りながら、その子を支える大人が、チームで支援していく必要性があります。

事例 6

保護者からの相談がきっかけで

～ LD 等通級指導教室を利用するまでの取組 ② ～

小学校へ入学して数ヶ月したとき、ツバサさんのお家から「学習や友だち関係で心配な点があります。以前、通級指導教室があると聞いたのですが」と在籍学級の担任に相談がありました。LD等通級指導教室の担当が教育相談を受け、在籍学級の担任を交えての懇談、WISC検査、市町村教育支援委員会での就学相談を経て、通級による指導を開始していくまでの事例を紹介します。

◇ 保護者からの相談



ツバサさんは保育園在園時、みんなから行動が遅れがちになったり、遊びの中で嫌なことを断れなかったりする場面が目立つなど、保護者も保育士も心配な面があったそうです。市では小学校就学前に巡回相談を実施しており、その相談の場で、相談員は、「小学校に入ってから心配な面があれば、入学する学校に相談できる教室（LD等通級指導教室）があるので、小学校の先生に相談してみてください」と保護者に伝えました。年長の3学期末には、保護者と市教育委員会の就学担当者、学校職員（来入児担当）、特別支援教育コーディネーターが出席し、就学に向けての「申し送りの会」が行われました。ツバサさんの場合、保護者が本人の将来を心配して医療機関を受診し、不注意優位のADHDの診断を受け、医療機関からのアドバイスも実践していました。小学校入学後、学習が進んでいくにつれ、ツバサさんは、友だち関係のトラブルや学習の困難さが顕著になっていきました。保護者は、在籍学級の担任にそのことを相談した折、就学前に通級指導教室の存在を巡回相談員から聞いていたことを伝え、通級担当へ相談することになりました。

◇ LD等通級指導教室での支援に向けて

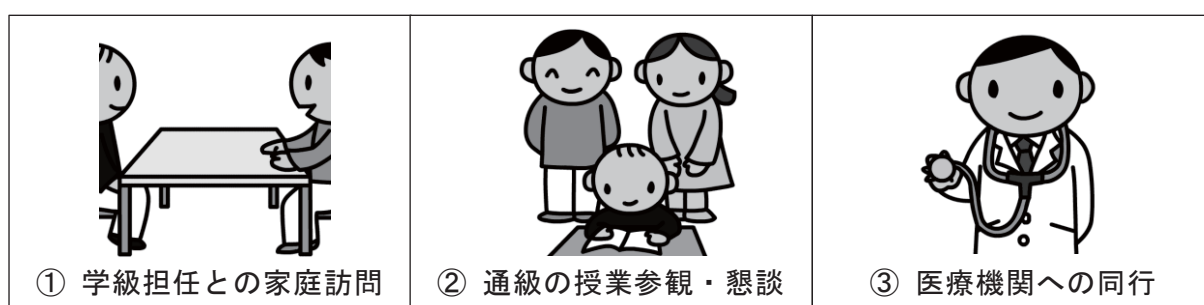
保護者の相談を受け、実際に授業参観をすると、以下のような点でツバサさんの生活に困難さが見られました。

- ① 温かな性格であることも手伝い、嫌でも断ることができない。言い出せない。
- ② 仲良く遊びたいが、遊びのルールを把握するのに時間が掛かる。
- ③ 書きたい思いは強いが、字形を整えることが難しい。早く書けない。

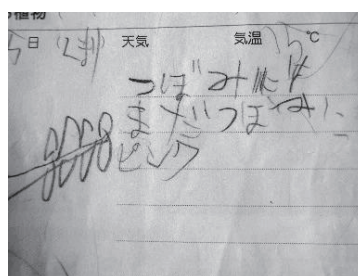
- ④ 整理整頓が苦手で、課題に取り組む場面では、みんなから遅れることがよくある。
- ⑤ 伝えたい思いはあるが、端的に伝えられず、言葉に詰まってしまうことがある。

早速、通級の体験を始めるとともに、WISC検査の実施、校内委員会でのツバサさんの困難さや支援の方向についての共通理解、市教育支援委員会へ相談を依頼することについての保護者の承諾などの手順を踏みながら、支援の実践と条件整備を同時に進めました。

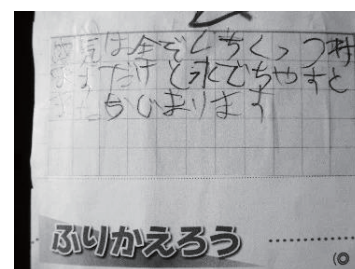
市教育支援委員会では、医療機関での診断とアドバイス、保育園在園時から巡回相談を受けてきた経緯も踏まえ、通級判断となりました。正式に通級が始まりましたが、通級指導は限られた時間での支援となるため、家庭や在籍学級でも支援が共有できるように以下の点にも配慮しながら取り組んでいます。



少人数や個別のSSTを継続してきたツバサさんは、入学当初の課題の1つであった友だちとの関わり方について、自分の意思を伝えられる力が付き、困難さがなくなりました。今は、もう1つの課題であった字形などを中心に支援しています。(写真:理科ノート)



従来のまま



マス目を貼ったもの

ここがポイント

ツバサさんの教育相談においては、小学校入学前から保育園や市教育委員会が教育相談に当たり、保護者も本人の困難さを感じていたことが、スムーズなLD等通級指導教室の利用につながりました。「周囲の大人が困っている」という視点で対象児童生徒の現状を説明するのではなく、「本人が困っているからこのような困難に直面しているのでは」という視点から懇談等を進めていくと、保護者との共通理解が図りやすくなります。小学校入学後でも、保護者と課題意識を共有することが支援を進めていく上で力になります。

事例 7

気持ちのコントロールへの支援

～通常の学級と連携した取組①～

小学2年生のサトシさんは、友だちに「だいじょうぶ？」とやさしい言葉を掛けることがある反面、「うるせー」などの暴言だけでなく、相手に暴力を振うこともありました。周りから「それは違うよ」「いけないよ」と指摘されたり勝負に負けたりすると、カッとなることがあるため、気持ちをコントロールすることが課題でした。

毎回の連絡ファイルで在籍校の学級担任と連携を取りながら、LD等通級指導教室での支援を通常の学級での生活に取り入れた事例を紹介します。

◇ 3年生から通級し、同学年3名でSSTをすることになったサトシさん

同学年の男子2名（サトシさんを含む）女子1名、計3名のグループでSSTを行う

もともとやさしい面をもっているサトシさんは、グループ学習でも「相手に譲る」「待つ」等のよさが見られました。その時を逃さず、「今の〇〇という言い方がよかったよ」「よくできたね」と、賞賛の言葉とともによかった具体的な姿を伝えることを繰り返しました。サトシさんは、褒められてうれしいという気持ちをもつだけでなく、「自分はこういうことができるんだ」「こうすればいいんだ」ということが分かってきました。

LD等通級指導教室より

悔しい気持ちの対処法を自分で試してきました。ゲームで負けたとき、笑顔でいられることができるようになり、そこをよい点として伝えました。気持ちの上がり下がりの幅が狭くなってきたような気がします。

学級担任より

運動会の練習の時に、負けても誰かに当たろうとはせず、次、頑張ろうという姿が見られたので、そこを褒めました。機嫌が悪いときは、どうしてそういう気持ちになったか話してくれます。

サトシさんは、WISC検査の結果で「処理速度」が低く、実際、「書く」「話す」にも時間が掛かりました。SSTでも、他の児童より行動が遅れることが多くありましたが、慌てずできる範囲で行うよう伝えていきました。話をするときも、完全な文章でなくてもゆっくり話せば友だちに理解してもらえることを実感し、安心したようでした。

LD等通級指導教室より

今回は、会話の仕方や言葉についての学習です。語彙量の少なさだけでなく、どう話してよいか分からないことがあるようです。言い方を練習しました。学級でも使えるとよいです。

学級担任より

友だちに対する言葉遣いを自分で考えるようになってきました。語彙量が少ないためか、ここでも「どういう意味？」と聞くことが多いです。ゆっくり説明すると、「そういうことか」と、安心するようです。

◇ 4年生で、他学年・5名のグループで学習するサトシさん

3, 4, 5年の男子5名(サトシさん含む)のグループでSSTを行う

初めは新しい男子5名のグループとなり、少し緊張していたサトシさんでしたが、昨年の積み重ねから自信が付いてきたのか、自分の意見を堂々と言う姿が見られました。グループは、人数が多くなった分刺激も増え、気持ちが高ぶる子どももいましたが、それに影響を受けることはほとんどなく、落ち着いてねらいに沿って学習に取り組みました。

授業内容は、1時間の中に知識と実践を組み合わせで行っています。例えば、乱暴な言葉を使うロールプレイと同じ場面で気持ちのよい言葉に変えてのロールプレイを見て、その違いを知ります。その後、いくつかの場面で使われている乱暴な言葉を自分でよい言葉に変えてみます。例えば、「早くプリント渡せよ」を「プリント来てるよ。後ろに回して」と変えると、言われる側の気持ちが大きく違うことが分かりました。

<p>LD等通級指導教室より</p> <p>言葉の変化で、感じる方が大きく違うことが分かったようです。ここ数か月、身長が伸びていますね。心の成長もあると思うので、その点も周りで様子を見ていきたいですね。</p>	<p>学級担任より</p> <p>自分なりに「おだやかに声を掛ける」という努力をしていることが感じられます。思春期に入ってきたのか、照れてしまうことがあるので、様子を見てこちらでも声を掛けていきたいと思っています。</p>
--	--

◇ 5年生で、通常の学級の中でリーダー的存在としてがんばるサトシさん

4年生の2月、在籍校の学級担任と保護者、通級担当との懇談で、全員がサトシさんの教育課題が達成されたという見解に至りました。本人も、自分の気持ちのコントロールに自信がもててきたということをお話してくれました。こうしてサトシさんは、通級を終了することになりました。今、5年生になり学級のリーダー的存在として活躍しています。

ここがポイント

LD等通級指導教室では、子どもの教育課題に合わせた学習を行うので、子どもの成長にとって有効な支援を見いだしやすくなります。その支援と支援をしての子ども様子を在籍校の学級担任に知らせることで、通常の学級での生活や学習の中でもその支援を行っていくことができます。

その際、連絡ファイルは通常の学級とLD等通級指導教室、家庭との情報交換用のツールとして大切なものになっています。連絡ファイル以外にも、年2回の在籍校の学級担任と保護者、通級担当との懇談、学級担任のLD等通級指導教室参観など連携には様々な方法があります。

(連絡ファイル)

月 日 () 年 月 日

ルールを守る力

○ルールを守ることがどうして大事なかわかろうとした。

○自分がルールを守っているか 考えてみた。

○「ルールを守る力」についてべんきょうして、感じたことを書きましょう。

ルールを守るのはとても大切だと感じました。

児童の自己評価

まなびの教室より	担任の先生より
<p>○「ルールを守る力」をつける学習であることも理解することができた。</p> <p>○「家で」と「学校」以外にポイント学習の振り返りをする機会がある。</p> <p>○自分の授業や先生の授業を楽しく行うことができた。</p> <p>○「ルールについて」差別に気づきました。</p> <p>まなびの教室では自分を振り返られる機会があります。ルールを守ることが大切だと気づきました。どうなるか、ヒューマンズを話しました。じいちゃんに話しました。</p>	<p>とてもいい学習をしてもらっていいですね。</p> <p>お家でいっしょやらないと行動につなげることが大切ですね。</p> <p>友だちの手助けができてお話しが楽しくなりました。</p>

通級担当と学級担任との連絡欄

事例 8

文字を書くことが苦手な子どもへの支援

～通常の学級と連携した取組②～

文字の形がなかなか捉えられない小学2年生のカズヤさん。頭の中で文章化ができて、書くことへの抵抗が大きく、作文がなかなか書けません。また、黒板に書かれた字をノートに写して書いていくことも疲れてしまい、途中でやめる事が多いです。

自校通級で、授業終了後、毎回学級担任と直接連絡を取り合いながら支援を行っていた事例です。

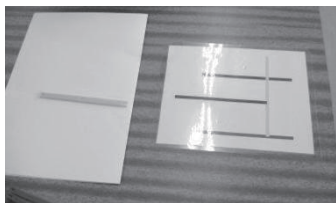
◇ カズヤさんのアセスメントを行う

検査やカズヤさんの「書き」の行動観察により、「鉛筆の持ち方」「力加減」「形の捉え方」「線の空間認知」に課題があることが分かってきました。

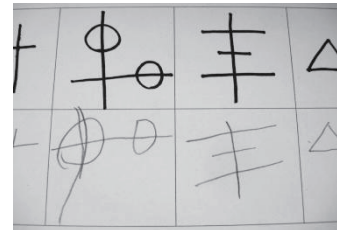
「間違った持ち方」



「形や線の位置が
90度回転する」



「線や形の位置関係
が捉えられない」



◇ 「個別の指導計画」で教育課題と支援方法について在籍学級と共通認識を図る

教育課題(在籍学級)

- 1 鉛筆を正しく持つことを意識するようになる。
- 2 強すぎる線を書かないようにする。
- 3 漢字を書くとき線の本数を正しく書く。



支援の方向

- 1 漢字を書くとき、鉛筆の持ち方を全体で確認

教育課題(まなびの教室)

- 1 鉛筆の正しい持ち方を知る。
- 2 「強く」「弱く」「普通」という力加減をして書く。
- 3 漢字を書くとき線の本数や位置関係を意識する。



支援の方向

◇ LD等通級指導教室での指導

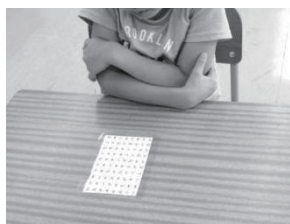
「クリップを使って正しい鉛筆の持ち方を身に付ける」



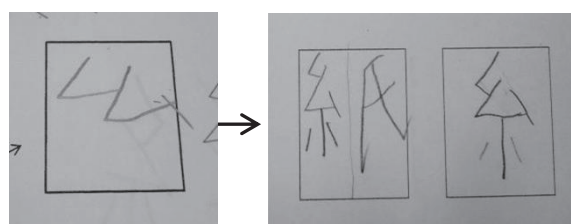
「力加減が分かる」



「目の動き」



「漢字を書いてみよう」



◇ 毎回のLD等通級指導教室での様子を伝え、通常の学級での支援について学級担任と共通理解する

練習したプリントと一緒に、授業の様子を写真に撮りそれを学級担任に見てもらうことで、児童の状態や成長を共通理解できました。LD等通級指導教室での有効な支援を伝えると同時に、通常の学級で必要と思われる支援についても共通理解していきました。

(例1) 座席の位置は、前から1～2番目にし、黒板に集中できるようにするとよいです。これは、個別指導ができやすい位置でもあります。集中して目を使うことが苦手なので、書いている場所が分からなくなったら、今どこを写しているのか黒板を指して教えていくことや手元には書き写す文を書いた紙を置く等の支援も必要だと思われます。

(例2) 漢字の筆順を学習するときの「空書き」では、大きくゆっくり書くように声を掛けていってほしいです。速いと手の動きがついていかないようです。こちらで正しい書き順が確かめていくこともできます。また、「はね」や「はらい」、「折れ」の意識をもつよう、板書による視覚的支援と、声掛けによる聴覚的支援の両方を使うと有効です。

(例3) 左手を紙やノートに添えるように置いているか、肩に力が入って上がっていないかを、机間指導等で確認してほしいです。

◇ 書くことに対して、自分で意識し始めたカズヤさん

「今日は、線からはみ出さないで書くぞ」「この字は、線が曲がらなかったよ」と在籍学級の授業で、学級担任に話すカズヤさんの姿が見られるようになりました。

LD等通級指導教室での学習も、30分以上文字や線を書いていることができるようになり、自分で「力をそんなに入れなくなったから、腕が疲れなくなってきた」と振り返っています。字形も整って、マスからはみ出ることが少なくなってきました。

ここがポイント

自校通級の子どもについては、在籍学級の担任と直接話すことができます。授業終了後、速やかに様子を伝えることができます。それぞれの様子が話だけでなく、写真やプリント、参観によって知ることができるのも、自校通級のよさです。共通した支援方法が取られ、また、他校通級の場合にも、在籍学級の担任との連携を工夫することが大切です。そのような連携の充実が児童の成長につながっていきます。

事例 9

書くことに抵抗感がある子どもへの支援

～LD等通級指導教室を終了するまでの取組～

小学5年生のワタルさんは、宿題の漢字練習や学校での漢字練習に毎日頑張って取り組んでいますが、書いた漢字が雑になったり、書いた漢字に細かい間違いがあったりして正確に覚えられず、徐々に書くことに自信をなくしていきました。通級担当や学級担任、保護者、医療機関が連携しながら指導・支援をすることで、力を付け通級教室を終了したワタルさんの事例を紹介します。

◇ どうして上手に書けないの

ワタルさんの漢字練習をしている様子や漢字練習をしたプリントを見返してみると、細かい部分の形や線の重なりを正確に捉えることに苦労していたり、視写する時に、何度も漢字ワークの手本を見ながら時間を掛けて書いていたりしていました。また、鉛筆の芯が何度も折れたり、字がマスからはみ出したりして、手先の不器用さもありました。

◇ 関係者がどのような指導や支援をしていきましょうか

○LD等通級指導教室

- ・タングラムや立体パズルなどを使い、視知覚のトレーニングをする。
- ・漢字をパーツ毎に色分けして、漢字の組み立て方を分かりやすく示す。



○在籍学級(学級担任)

- ・マス目の大きなノートや罫線入りのノートを使う。
- ・座席を前にして、困っていたら声を掛けられるようにする。



○医療機関(作業療法士)

- ・物をつかむ、物を積み上げる、鉛筆グリップを使って鉛筆の持ち方の練習などの手先の操作性のトレーニングをする。

ワタルさんが学校で取り組んでいる学習の様子、家庭学習の様子やアセスメントの結果を基に指導・支援の方向を決めました。学期に1回は、通級担当、学級担任、医療関係者(作業療法士)、保護者とでワタルさんの様子を話し合い、次の学期の指導・支援の方向を考えました。

指導・支援を積み重ねていくことにより、漢字の細かな部分が見えやすくなったり、字がマスの中に入るようになってきました。何より、漢字を練習した後の小テストや学期のまとめテストで点数がとれるようになりました。ワタルさんにとっては、それが大きな励みとなって漢字練習も前向きに取り組むことができるようになりました。

また、漢字を書くことに自信がもてるようになると、日記や他の教科の学習などでも書くことへの抵抗も少なくなりました。



◇ 通級を終了してもよいですか

自分から進んで学習に取り組めるようになり、自信ももてるようになったワタルさんの様子から、通級を終了するべきか、継続して指導が必要なのを見極める必要が出てきました。そこで、個別の指導計画の内容を確認した上で、以下のことを行いました。

- ① 通級担当が在籍校に行き、書く場面を中心に授業を参観しました。
- ② 作業療法士が学校に行き、算数でコンパスや分度器などを使いながら作図をする授業を参観しました。
- ③ 校内から、特別支援教育コーディネーターや学年の教師が授業参観をしました。



【支援会議】参加者…通級担当、学級担任、作業療法士、保護者、特別支援教育コーディネーター
○文字の形が整い、マスの中に文字が入っている。
○黒板を写すことやプリントに答えを書くことは、みんなと同じペースでほぼできる。
○図形の学習では、自分から補助線を引いたり、目盛りを数えたりしながら自力で取り組んでいた。コンパスや分度器、定規の使い方は書き直すことがあるものの正確にできていた。
○困ったことは学級担任にすぐに聞くことができる。前向きに根気強く取り組んでいた。

支援会議の内容を校内教育支援委員会に特別支援教育コーディネーター及び学級担任が報告し、検討の上、通級を終了することになりました。



◇ ワタルさんの指導・支援を中学校につなぐ

6年生の2月に進学する中学校で支援会議を開催しました。

【支援会議】参加者…通級担当、学級担任、作業療法士、保護者、小・中特別支援教育コーディネーター、中学校現学年主任、小中連携担当職員
○個別の指導計画や各検査の結果を渡し、手先の不器用さや視空間認知の苦手さがあるために、黒板を写すのに時間が掛かったり、図形が複雑になると捉えにくかったりすることを説明した。
○中学校の学級担任や教科担任に伝えることを確認した。
・座席は前にする。困ったことがあったら、教師に相談できるように心掛けてもらう。
・小学校で使っていたのと同じくらいのマス目の大きなノートや罫線の入ったノートを使う。また、図形では補助線を入れてもよいことにする。
・黒板を写すのに時間が掛かるので、ノートに書く必要がある内容は消さずに残す。
・漢字練習や英単語の家庭学習は、ワタルさんや保護者と相談し、量を調整する。

ここがポイント

児童の障がい起因する困難さを通級担当だけでなく、学級担任や家庭、医療関係者等と連携しながら共通理解を図り、克服できるように支えていくことが大切です。また、終了に向けては、学習や生活の取組の様子などの姿を基に、複数の目で丁寧に見極めていく必要があります。通級を終了する際には、指導・支援を継続していくことを学級担任や保護者、医療関係者と確認しておくことが大切です。終了後も、学級担任や保護者、医療関係者から情報を集め、見守っていくことが子どもの安心感にもつながります。

事例 10

小学校から中学校へ

～中学校で巡回型通級を利用した取組～


小学校で通級による指導を受けてきた中学1年生のヒナタさん。本人も同席して小学校から中学校への支援の移行会議や見学などを数回にわたり行いました。入学してからは、小学校の通級担当が進学先の中学校に出向き、巡回指導の試行をしています。通常の学級在籍での教科担任制，スライド式時間割など，システムの違いの中で通級による指導を利用した事例を紹介します。

◇ 小学校までの通級による指導

- 小学校入学前に自閉症スペクトラムの診断
- 小学1年生から小学6年生まで通級による指導
- 週2時間の指導を4年間，週1時間の指導を2年間
- 個別指導と少人数グループでの指導の組み合わせの指導形態
- 指導のねらいと内容
 - ・話したり書いたりして人に困ったことを伝えるスキル等の獲得，生活や学習の計画の立て方，行事の際のスケジュール確認や見通しのもち方，自分の得意不得意を知る自己理解の学習，感覚運動面の学習，教科学習のつまずきやすい内容の予習 等

【ヒナタさんが学習で使ったワークシート】

ワークシートというツールを使って，自分の気持ちを整理し，日常場面でも人に気持ちを伝えることができるようになりました。このツールは中学校にも引き継ぎました。

<p>わたしのこまったこと ワークシート</p> <p>記入日(月 日) 年 氏名</p> <hr/> <p>何にこまったの？(どんなとき？)</p> <div style="text-align: right;"></div> <p>くわしいエピソード</p> <p>そのときの様子 様子の絵</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <hr/> <p>そのとき、あなたは？</p>	<p style="text-align: center;">「こんなとき どうする？」</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th style="width: 30%; text-align: left;">こんなとき</th> <th style="width: 30%; text-align: center;">どうする？</th> <th style="width: 30%; text-align: center;">どうなる？</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td style="vertical-align: top;"> いつ？ だれが？ だれに？ だれと？ 何をした？ あなたの気持ちは？ 相手の気持ちは？ </td> <td style="vertical-align: top; text-align: center;"> 方法その① 方法その② 方法その③ </td> <td style="vertical-align: top; text-align: center;"> 結果その① 結果その② 結果その③ </td> </tr> <tr> <td colspan="3" style="text-align: center; padding-top: 10px;"> どの方法なら、うまくいきそうかな？ </td> </tr> </tbody> </table>	こんなとき	どうする？	どうなる？	いつ？ だれが？ だれに？ だれと？ 何をした？ あなたの気持ちは？ 相手の気持ちは？	方法その① 方法その② 方法その③	結果その① 結果その② 結果その③	どの方法なら、うまくいきそうかな？		
こんなとき	どうする？	どうなる？								
いつ？ だれが？ だれに？ だれと？ 何をした？ あなたの気持ちは？ 相手の気持ちは？	方法その① 方法その② 方法その③	結果その① 結果その② 結果その③								
どの方法なら、うまくいきそうかな？										

◇ 小学校から中学校への移行支援の経過

- 中学校を複数回見学（特別支援学級の授業と通常の学級の授業の両方）
- 本人を交え、小学校と中学校で移行支援会議を実施
小学校の通級の授業で自己理解の学習として書いた「自分マップ」(※)を提示しながら、どのような支援があるとよいかを自分の言葉で説明
- 「個別の指導計画」「プレ支援シート」の引き継ぎで支援のポイントを共有
- 困ったときに相談する先生について、あらかじめ確認（担任，特別支援教育コーディネーター，相談室担当職員，養護教諭）

※「自分マップ」(自己認知整理表)

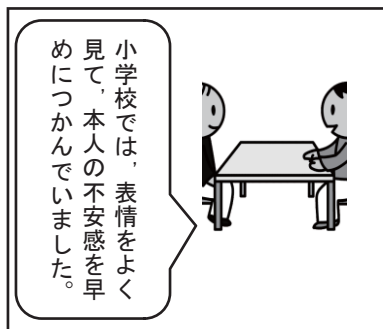
自分マップ		年	氏名
		家	学校
得意なこと			
好きなこと			
できるようになったこと			
苦手なこと			
できるようになりたいこと			
できるための攻略法			
目標			

ヒナタさんが伝えたことの概要

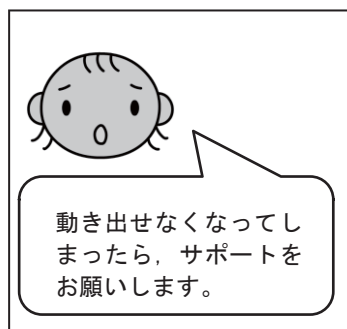
- ・宿題を始めるまでに時間が掛かる。計画的に動くことが苦手。
- ・友だちが増え、周りの目を気にしすぎずにポジティブに考えて、明るくいられるようになってきた。ただ、人の輪ができていると、中に入りにくいときがある。
- ・心配なことがあると、自分で伝えようとするが、動き出せなくなることもある。

↓
私自身、努力していきたいと思っています。でも、うまくいっていないときには、声を掛けてもらい、どうすればいいか教えてもらいたいです。

<移行支援会議で>



小学校学級担任から説明



ヒナタさんから説明



受け入れ側(中学校)の捉え

◇ 中学校での支援

- 4月：移行支援会議での申し送りにより、ヒナタさんの教科担任者会を行い、「個別の指導計画」を基に、生徒理解と教科における配慮点を確認しました。(担任，特別支援教育コーディネーター，教科担任，部活顧問)
- 6月：宿泊行事に向け、心配な点や配慮点についてヒナタさんを交えて確認しました。
- 7月まで：授業の様子を巡回による参観で把握しました。入学前に板書をノートに書き写す速度について不安があることを伝えてあったので、書き写す範囲の指定，箇所の色分け等の支援が行われていました。それによって、ヒナタさんは、学習についていけていることが確認できました。

ヒナタさんが学校生活に見通しがもてたところで、本人に巡回による通級指導の授業時間帯を選んでもらいました。学級担任も交え、指導時間数も相談して決めました。(月1～2時間、放課後の部活動と重なる時間を選択) 個別の取り出し指導は2学期からスタートしました。

○10月～12月：教科ごとの学習面での困難点やつまずき、生活行動面の様子を把握し、「個別の指導計画」(※)を見直し・修正しました。個別懇談会で担任、保護者、通級担当とともに話し合いました。分かりやすい授業について再度教科担任者会を行う中で、ヒナタさんへの支援の内容を確認しました。

○1月～3月：支援の内容の確認と評価を行いました。2年生に進級する際には、学級編制替えに向け、校内で次の学年担当への移行支援を行いました。

※ 中学校の懇談会で用いた「個別の指導計画」学習面(教科別)と生活・行動面(一部抜粋)

	短期目標(通常の学級)	短期目標(家庭)	短期目標(巡回指導)
	・分からないことや困ったことは授業中に先生が席の近くにきたときに軽く手を挙げ質問したり、後で聞きに行ったりすることができる。	・宿題が時間内に終わる。(夜・朝・学校での時間で)	・困った時に伝えるタイミングや言い方を理解し、練習する。 ・ストレス反応に気づき、思い込みを変えようとする。
	通常の学級での指導の手立て (必要な合理的配慮を含む)	家庭での指導の手立て	巡回による通級指導、特別な場での指導の手立て
学習面	国語…読解のコツや問題集の取組方を質問した時に答える。	・家庭学習は15分単位でやり、休憩を10分程度挟むなど、集中しやすいサイクルで行う。 ・手を付けやすい宿題から取り掛かるように助言する。 ・得意な英語は塾での予習を継続するように支援し、自信をもって授業に臨めるようにする。 ・テストの点について、心理的プレッシャーを掛けないように見守る。	・教科担任や研究室に質問に行く時の練習をする。 ・テスト時の技術的なコツ(できる問題から取り掛かる、時間配分等)を確認する。 ・テストでの誤答分析をする。 ・今、できていることの確認をする。 ・勉強の計画やテスト範囲の確認、優先的なスケジュールの立て方を学習する。 ・ノートテイク方法の確認をする。
	数学…図、絵などの説明を加え、イメージ化を補助する。		
	英語…担任が担当。		
	社会…ノートテイクは範囲指定をし、ポイントを絞る。時間の確保。漢字で回答する単語を伝える。		
	理科…ノートテイクは上記同様。		
	体育…技能的な指摘をせず、取組の意欲を認め声を掛ける。		
	全授業共通(小学校からの引き継ぎ事項) ・指示は端的に、曖昧な表現はできるだけ避け具体的に示す。 ・全体指導の後、理解できているか困りはあるか、机間指導で様子を確認する。 ・おおよその学習の流れを伝え、見通しをもちやすくする。(板書など)		
生活・行動面	部活動…部活のある日のスケジュール(一覧)をあらかじめ文書で示し、見通しがもてるようにする。急な連絡や変更はしない。 学級(担任) ・友人関係の見守り。場合に応じて関係をつなげる言葉を掛ける。 ・お薦めの本を紹介する。本を介してコミュニケーションを図る。 ・担任の体験談や人生の教訓などを折に触れ、伝える。	・帰宅後や休日のタイムスケジュールを無理のない計画で作成し、掲示する。	・日常的に相談したい時には、担任または特別支援学級の教員のところに行くことを確認する。 ・友人関係の悩みへの対応方法を学習する。 ・ストレスマネジメントの学習をする。

◇ 中学校生活が進むにつれて変わっていく悩みや課題

巡回による通級指導では、中学生になったヒナタさんの現在の状況をつかみ、悩んでいること、相談したいことを中心に授業を展開しました。

1学期は、中学校生活のリズムや教科担任制やスライド式時間割など、環境の変化に関係すること、学校生活に慣れてきた2学期初めには、友人関係のことや休み時間の過ごし方、1年が半分以上過ぎた頃には、テストの点数が思ったように上がらないことやテスト勉強のやり方について、とヒナタさんの悩みも変わっていきました。

学習面について、通級の1時間の授業の中では扱える内容は限りがあります。テストでどのようなつまづきをしているかを一緒に分析したり、テスト勉強の計画表の作成では付箋を用いて優先順位が分かり変更もしやすいように視覚化するなどの提案をしたりしました。次のテストでは、「勉強の仕方がよく分からない」「苦手だ」と言っていた教科については前回より点数が上がりました。教科全般ができないのではなく、テストでの言い回しによる解答の仕方やテストをする手順に課題があること、得意な問題と苦手な問題が分かってきたので勉強の優先順位が少し見えてきたことなどが理由として推測されました。ヒナタさんは、小学校の頃からの通級による指導により、悩みを打ち明け、解決策を求め、新たに提案されたことや学習したことを自分なりに試す力が付いてきています。中学生という思春期において、自分のことをよく理解していることも、巡回による通級指導を含めた周囲からの支援を受け入れる上では大事になります。

中学校では、巡回による通級指導がない時にも特別支援教育コーディネーターがヒナタさんの様子を捉え把握して、通級担当に随時連絡をしてくれています。これにより、その時にヒナタさんがもっている悩みや実情に合わせた内容を準備し、巡回による通級指導の授業を行うことができます。中学校内での在籍学級の担任と特別支援教育コーディネーターとの連携は鍵になります。ヒナタさんについて捉えた情報を、職員会等で発信して中学校内の教員が共有しようとしています。各教科担任による毎日の授業、保護者との連絡などその時々に応じた必要な支援もしやすくなっています。中学校での生徒理解、校内チーム支援のあり方がヒナタさんの毎日の中学校生活を支える基盤になっています。

ここがポイント

中学校での巡回型通級指導はまだ試行中です。小学校と中学校では年間の行事や日課、授業システム等の違いから難しさはあるものの、生徒の実態に応じて方法を見つけ、有効な通級指導を行っていくことは可能です。指導形態も個別指導だけでなく該当者の人数と課題によっては、小集団での指導も考えられます。学校種を越えて支援者が歩み寄りながらつながっていくことが大切です。小学校から中学校への支援の引き継ぎ（移行支援）や中学校入学後の生徒理解と校内組織等において、小中双方の担任と特別支援教育コーディネーターの役割と動きが重要です。また、生徒本人が前向きに自分にとってよい方法を選択し、必要だと考えた支援を受け入れようとする姿勢を小学校在籍時に育てていくことも大切です。さらに、生徒がよりよい中学校生活を送り、もっている力を生かして将来的な社会参加を目指すという点から見ても、小学校から中学校への支援のつながりが重要です。

事例 11

盲学校における通級の事例

盲学校の通級による指導では、小中学校に在籍する視覚障がいのある児童生徒が、盲学校に通って指導を受ける場合もあります。

ここでは盲学校の通級による指導により視覚補助具の活用や国語の学習に自信をつけ、在籍校の学習に意欲的に取り組むようになった小学1年生のタロウさんの事例を紹介します。

◇ 「入学前のタロウさん」

生まれた時から強度近視があるタロウさんは、小学校入学前から盲学校の幼稚部で支援を受けてきました。タロウさんは、板書や遠くものは、はっきり見えませんが、教科書や近くものは見えます。私は、「ものが見える」ということを理解しているタロウさんが、「遠くのものも見えた」という体験をしたら、きっと、「もっと見たい」という願いをもち、その願いがタロウさんの視覚認知力の向上につながるのではないかと考えました。そこで、単眼鏡を使って遠くのものを見る学習を行いました。

最初に、「タロウさん見てごらん」と声を掛けながら、タロウさんの目の前に単眼鏡を持っていきました。黒板にはタロウさんの好きな動物の絵を提示しておきました。「あれ、何だろう？」黒板をじっと見つめるタロウさん。しばらくして、絵カードを見つけ、「分かった。犬だ」とうれしそうに言いました。通級指導教室の学習を通して、単眼鏡を使うと遠くのもがよく見えることに気付いたタロウさんは、保育園でも単眼鏡を毎日使うようになりました。朝の会で黒板の予定を確認したり、探検ごっこで、園庭の動植物を見たりする活動を楽しんで行うようになりました。



◇ 「単眼鏡を使ってものを見ると楽しいな！」

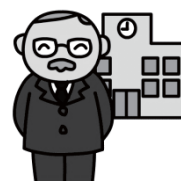
地元の小学校に入学したタロウさんは、盲学校で月2時間の通級による指導を受けることになりました。通級指導教室では、タロウさんの興味・関心がある絵カードや単語を黒板に提示して一緒に見ました。段々と絵や文字を認知するスピードが速くなってきたので、「あれは、何と書いてあるかな？」とクイズ形式で、黒板の文章を正しく読んだり書き写したりする課題を行いました。学習を通して、タロウさんは、「単眼鏡楽しいから、もっとやりたい！」と言うようになりました。この姿からタロウさんは、「もっと自分の見たいものを見たい時にどんどん見たい」と願っていると捉え、通級指導教室で、ピント合わせの学習に取り組むことにしました。それまでピント合わせは、教師が行っていました。まず最初は、タロウさんの手に私の手を添えて一緒に行うようにしました。やがて、タロウさんが自分でピントの操作をし始めるようになったところで、添えていた手を離し、声を掛けるのみで後は見守るようにしました。こうして練習を重ねるうちに、タロウさんは自分で正しくピントを合わせることができるようになっていきました。

◇ 「単眼鏡はタロウさんにとって大切なものなんだ」

6月の支援会議の際に、担任や保護者から「全校行事に参加する際にも単眼鏡を使いたいので、全校児童に話をしてほしい」という提案がありました。単眼鏡を首に掛け、常に持ち歩くタロウさん。「僕にも貸して」「ちょっと見せて」とタロウさんの単眼鏡に興味を示す友だちがいて、その対応にタロウさんが困っているようでした。校内委員会で協議をした結果、校長先生が全校朝会で話をするようになりました。

<校長先生の話の趣旨>

- ① いつでも使えるように、首から下げているので承知しておいてほしい。
- ② 単眼鏡はタロウさんにとって、なくては困る大切な道具なので、面白半分に、「貸して」などとは言わないようにしてほしい。
- ③ もし、タロウさんが見えづらいような様子が見えたら、ぜひ力になってあげてほしい。



校長先生の話があった日から、タロウさんの単眼鏡を借りようとする友だちはいなくなりました。保護者は、「校長先生が全校にお話をしてくださったので、タロウが安心して学校生活を送ることができています」と担任に伝えました。2学期になり、在籍学級では席替えをすることになりました。今までは1番前の席でしたが、席替えの結果、後ろから2番目の席になったタロウさん。今では毎日、自分で単眼鏡を操作して、連絡黒板の予定を連絡帳に正確に書いています。

◇ 「漢字が上手に書けるようになったよ」

通級指導教室の書字学習では、文字カードや漢字カードを手元に置いて、よく見て正しく書いています。自分の書いた文字とカードを見比べて自分の誤りに気付いたり字を丁寧に書こうとしたりする姿が見られるようになりました。

また、タブレット端末（i P a d）を使って、漢字の読み・書き・筆順を確認する学習も行っています。i P a dは画面が見やすいようで操作方法に慣れてくると、一人で学習を進めるようになりました。漢字の読み方を調べて文章を読んだり書いたりするうちに、「漢字を覚えると勉強が楽しくなってきたよ」と言うようになりました。在籍学級においても漢字の学習に自信をもって取り組むようになり、国語のテストの成績が向上してきました。ものをよく見る体験を重ねる中で興味・関心も広がり、家庭でも、「お父さん、一緒に図書館の本を読もうよ」と言って読書を楽しむようになりました。保護者は、タロウさんが在籍学級に適応し、伸び伸びと生活したり学習したりしていることをとても喜んでいきます。

はねるんだ



ここがポイント

盲学校の通級による指導において、単眼鏡やタブレット端末などを活用する際は、子どもの「見ること」に対する意欲を大切に、道具を使う心地よさを子どもが実感し、「もっと使いたい」という気持ちが高まるように支援します。その際、一人一人の視知覚に配慮した学習支援が大切です。また、通級の学習で身に付けた力を、在籍学級で自信をもって発揮するためには、通級担当と保護者、在籍校の担任、学校長をはじめとする他の教員等が、その子の情報を共有し、支援方法について共通理解を図っていくことが重要です。

事例 12

ろう学校における通級の事例

ろう学校の通級による指導は、難聴児童生徒の在籍する学校へ訪問して行う巡回型を基本としています。難聴児童生徒の生活の場で、リアルタイムな支援や、周りの人の難聴理解を深めるといった環境調整を図ることにより、本人がもてる力を精一杯発揮できるようになると考えているからです。

ここでは、話の聴き方について通級担当と話し合いながら、自己理解を深め、友だちと一緒に学ぶ楽しさを感じていった、小学6年生のケンタさんの事例を紹介します。

ケンタさんは小学1年生からろう学校の通級による指導を受けています。ケンタさんの学校では、毎年、きこえについての全校集会や職員研修を行っており、ケンタさんを支える温かな雰囲気があります。また、ケンタさんの学級担任は、通級担当との情報交換を基に、話し方に気を付けたり、FMマイクを使用したりしています。そのような環境で学びながら、ケンタさんは、これまでの5年間で、一斉授業の場面でも、学級担任の話を集中して聴く力が向上してきました。

◇ 「〇〇さん、今、何て言ったの？」

高学年になると、授業中、学級担任が話す中に聴き慣れない言葉がたくさん出てくるようになりました。



何て言っ
てたの？



そんなときケンタさんは、教科書を見て、「今、何て言ったんだろう」とつぶやいて、どの言葉のことか確認します。しかし、そうやってケンタさんが努力をしている間にも、友だちの発言は続き、気付くと話が進んでしまっています。こういった中で、ケンタさんが、横にいる私に、「今、〇〇さん、何て言ったの？」と尋ねることが増えてきました。私は、この姿を、「先生の話すことだけでなく、友だちの言っていることも知りたいと願う姿」と捉えました。

◇ 「こんなこと言ってたんだね」

私は、ケンタさんが、「友だちが話をするときは、自分から友だちに体を向け、話に集中する」ことを大切に、支援を考えました。まず、ケンタさんが、友だちがどのようなことを話しているのかを知るために、私が友だちの話を聞き取りながら、右のようにメモ書きして手渡すことにしました。このメモを見たケンタさんは、「(友だちは) こんなこと言ってたんだね」とつぶやいた後、「今度からは、友だちの方を見て、聴いてみる」と言いました。その後、メモ書きの支援を徐々に減らしていきながら、ケンタさん

担任：「水の中に味噌を入れて、温めたときにどうなるか、観察します」

Aさん：先生、その味噌、だし入り？ 飲みたい！

Bさん：え〜、やだあ。ピーカーだよ。

担任：「飲まないよ。しっかり観察してください」

Cさん：何か、味噌、ジャンプしてるみたい。

Dさん：水ってあったかくなると、上に行くってこと？

担任：「いいところに気付いたね」

の姿を見守るようにしました。すると、ケンタさんは友だちの発言に気づくと、やっていることをやめ、友だちの方に体を向け、集中して話を聴こうとするようになりました。

個別指導の中で私が、「友だちの方をよく見て聴くことが増えてきたね。何か変わった？」と尋ねると、「友だちが何て言っているか分かってうれしい」と答えました。ケンタさんは、友だちの話にも意識を向けて聴くことで、話をよりよく聴き取ることができることを実感しているようでした。

◇ 「でも、知らない言葉が出てくると、何て言ったか分からない…」

あるとき、ケンタさんが、「初めて聴く言葉はよく分からない。何て言ったか考えているうちに話が進んじゃう」と悩みを打ち明けました。そこで、私は、どうすれば友だちの話を正しく聴き取り、学習を進めていくことができるか、ケンタさんと考える時間を設けました。「ケンタさんは、前、教科書を見て先生が言ったことはこれかなって考えてたよね？」と尋ねると、ケンタさんは、「…そうか！ 先に教科書を見ておけばいいかも」と、答えました。そこで、次に勉強する教科書の場所を家で読んでおいたり、初めて聴く言葉があったら先に調べておいたりするとよいことをケンタさんと一緒に確認しました。

◇ 「俺も、同じ！」

ある日の理科の授業中、ケンタさんは友だちの発言を聴いて、「俺も同じ」とつぶやき、自分から挙手して、「ぼくも、〇〇さんと同じ意見です」と発言しました。友だちの発言には、普段の生活ではあまり使うことのない、「養分」「デンプン」といった言葉も含まれていましたが、ケンタさんは正しく聴き取り、意味を理解して発言しているようでした。授業が終わったところで、ケンタさんに、「しっかりと発言できたね」と声を掛けると、ケンタさんは、「昨日、家で教科書読んだからね」とにっこりして言いました。



◇ 「ケンタさんの気持ちを、クラスみんなで理解したい」

ある日の個別指導で、ケンタさんは、「みんながワッと笑ったとき、ぼくだけ分からない」と言って、寂しい思いをしていることを打ち明けました。ケンタさんが語った思いを学級担任に伝えると、「ケンタさんの気持ちを、クラスみんなで理解したいです」との申し出がありました。そこで、ヘッドフォンを使った難聴の疑似体験を提案しました。早速、学級担任は、クラス全員が交替で、音楽が流れてくるヘッドフォンを付ける体験を給食の時間に設けました。子どもたちからは、「何を話しているのか分からなくて、寂しかった」「自分だけ分からなくて、不安になった」といった感想が聞かれ、体験を通して聴こえにくさのあるケンタさんの思いに心を寄せてくれたようでした。疑似体験をきっかけに、さりげなくケンタさんを支える雰囲気が高まっています。

ここがポイント

ケンタさんの育ちを支えたものは、ケンタさん自身が友だちと一緒に学ぶことに意欲的だったことが挙げられます。ケンタさんの姿から、「こうなりたい」という願いを推察し、ケンタさんの主体性と自己理解を大切にした支援を行ってきました。事例のような支援が有効に機能したのは、学校全体で難聴について正しく理解し、みんなでケンタさんを支援していこうという雰囲気が育まれていたためです。在籍校と通級担当が連携を密に取ることで、聴こえにくさのある子どものさらなる育ちを支えることができるようになります。

